有賀喜左衛門における主従関係とモラル
―戦前・戦後の「家」および社会関係の変容を通して―

○本多　真隆（明星大学）

１．問題の所在

子どもの頃、七代目喜左衛門になって、炉端に座っていると、小作人が来て、すぐには上へあがろうともしないで、土間で遠くからおじぎをしたりしている、それを炉端に座らせて、彼らの生活について聞いた、その人たちの話から、また彼らの家の前や田畑で彼らの生活を見て、五反百姓とか水呑百姓とかいわれた人々の生活の苦しさを痛いほどわかって、親方百姓としての責任をどうして果たすかを、だんだん考えた（中野 2000: 62）

中野卓によれば、生前の有賀喜左衛門は、自身の幼少期の体験と問題意識の形成について上記のように語ったという。よく知られているように、村落研究の泰斗である有賀は、郷里の地主でもあり、その立場は戦後の農地改革まで続いていた。

有賀についてはすでにさまざまな視角から研究がなされているが、その多くは「家」や同族団に関する彼の学説の検討、また柳田國男などの論者との影響関係や、他の社会学理論との関連をあつかった理論的研究が主である。だが有賀は一方で、「親方百姓としての責任」、つまり農村社会のモラルを重視する論者でもあった。こうした志向は、有賀のライフヒストリーだけでなく、「ヒューマニズム」や「公」と「私（人情）」の問題をはじめとした彼の代表的研究にも見出せるものであるが、これまで十分に着目されてきたとはいいがたい（有賀 [1947]1970, [1955]1967）。

本報告では、有賀理論の主要キーワードのひとつである主従関係をベースとして、彼がそこにどのようなモラルを見いだしたか、ないしは重視していたかという観点から、彼の議論および立場性を系統的に把握することを目的とする。

２．対象と方法

資料は主に『有賀喜左衛門著作集』（未来社）を用いるが、収録にあたって大きな改変箇所がみられる論考については、必要に応じて発表時のものを参照する。抽出および分析にあたっては、主従関係（親方小方、本家分家）について論じた諸研究を中心に、有賀の議論のなかから、特に彼の心情ないし論理に回収しきれない問題意識が表出している箇所に焦点をあてる。またテキストの内容だけでなく、同時期の時代的社会的背景との関連や、有賀のライフヒストリーにも注意を払う。

３．考察

戦前期のマルクス主義経済学や、戦後の政治、社会構造の変容に際して、有賀はさまざまな議論を展開し、独自の立場を形成してきたが、その中心には農村社会のモラリストとしての彼の問題意識があったというのが、本報告が提出する視点である。報告では有賀理論の内在的な検討だけでなく、彼が発見した主従関係（およびそのモラル）の社会学的意義や、思想史的立ち位置についても議論したい。

＜参考文献＞

有賀喜左衛門, [1947]1970, 「農業の発達と家制度」『有賀喜左衛門著作集IX』未来社, 108-20.
――――, [1955]1967, 「公と私――義理と人情」『有賀喜左衛門著作集IV』未来社, 187-277.
中野卓, 2000, 「有賀喜左衛門的研究法」『三田社会学』5: 62-8.

（キーワード：有賀喜左衛門、主従関係、戦前・戦後）